校長室便り

（文　責）
ドーハ
日本人学校
校長
酢谷昌義

朝読書で始まる落ち着いた１日

見つけた「すてきな詩」

先週は出張で日本へ帰っていました。用務以外で私にとって貴重だったのは、書店で様々な本を見ている時間でした。子ども達の指導の参考になるものはないかと、ずいぶん探し回りましたがなかなか思うようなものは見つけられないものです。

そんな中で、必ずこれはというものが見つけられる場所があります。それは「詩の本」のコーナーです。今回もいろいろな詩集をめくっていて、とてもすてきな詩を見つけました。それがこの「子ども」という詩です。子ども達を育てることを仕事としている私達教員にとって、とても味わい深いものがあります。

当然のことが並べてあるだけのようにも思いますが、普段の指導でこういうことを常に意識しているかと聞かれると、正直不安な面があります。しかし、折に触れて子ども達それぞれに良い評価を与えられるようにと日々取り組んでいます。

毎日元気良く走っています

改めてこういう詩を読むと、子ども達に「激励・寛容・賞賛・フェアプレー・友情・安心」などを、もっともっと経験させることが必要であり、そのための工夫が求められていると感じます。

「育てたように子は育つ」とも言われます。子どもの成長に深く関わっている私達は、目の前の出来事への適切な対応はもちろん大切ですが、それで終わるのではなく、子ども達の将来を見通した指導や働きかけの重要性を忘れてはならないと思います。

「子ども」

ドロシー・ロー・ノルト

批判ばかりされた子どもは　非難することをおぼえる
殴られて大きくなった子どもは　力にたよることをおぼえる
笑いものにされた子どもは　ものを言わずにいることをおぼえる
皮肉にさらされた子どもは　鈍い良心のもちぬしとなる
しかし、
激励をうけた子どもは　自信をおぼえる
寛容にであった子どもは　忍耐をおぼえる
賞賛を受けた子どもは　評価することをおぼえる
フェアプレーを経験した子どもは　公正をおぼえる
友情を知る子どもは　親切をおぼえる
安心を経験した子どもは　信頼をおぼえる
可愛がられ抱きしめられた子どもは　世界中の愛情を感じることをおぼえる

子ども達の笑顔が１番！

校長室便り

（文　責）
ドーハ
日本人学校
校長
酢谷昌義

「よさこいソーラン」練習風景

「雨ニモアテズ」…?!

昨日に続き「雨ニモアテズ」という詩を紹介します。今から１０年ほど前、宮沢賢治の故郷・盛岡の小児科の先生が学会で発表され、マスコミでも取り上げられたことがあるのでご存じの方もおられると思います。この先生は職業上多くの子どもと接していて、当時この詩はまさにぴったりと思われたということです。作者は不詳となっていますが、どこかの学校の校長先生だといわれています。

これが紹介されてからは、部分的にさらに作り替えられたものがいろいろと登場するなど、この詩が与えた反響には大きなものがありました。

昨日紹介した「子ども」という詩もそうですが、子どものことを考える・大事にするということは、どうすることなのかということです。これからの社会を生き抜く強さを身につけさせなければならないのに、それとは逆の方向に子ども達を引っ張ってはいないか。当然のことではありますが、本当に可愛がるということは、子どもの機嫌をとることとは別の次元のことだと思います。

この詩と宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」を比べてみると、あまりの違いに本当に驚きます。賢治が理想とする姿と、ここまで変わってしまった子ども達の姿。その原因を特定することは難しく、いろいろな要素が含まれていると思います。しかし、子ども達をこんなふうにしたくないという思いは、いつの時代でも共通の願いだと思います。

「雨ニモアテズ」
（「雨ニモ負ケズ」現代版パロディー）

雨ニモアテズ　風ニモアテズ
雪ニモ　夏ノ暑サニモアテズ
ブヨブヨノ体ニ　タクサン着コミ
意欲モナク　体力モナク
イツモブツブツ　不満ヲイッテイル
毎日塾ニ追ワレ　テレビニ吸イツイテ　遊バズ
朝カラ　アクビヲシ　集会ガアレバ　貧血ヲオコシ
アラユルコトヲ　自分ノタメダケ考エテカエリミズ
作業ハグズグズ　注意散漫スグニアキ　ソシテスグ忘レ
リッパナ家ノ　自分ノ部屋ニトジコモッテイテ
東ニ病人アレバ　医者ガ悪イトイイ
西ニ疲レタ母アレバ　養老院ニ行ケトイイ
南ニ死ニソウナ人アレバ　寿命ダトイイ
北ニケンカヤ訴訟（裁判）ガアレバ　ナガメテカカワラズ
日照リノトキハ　冷房ヲツケ
ミンナニ　勉強勉強トイワレ
叱ラレモセズ　コワイモノモシラズ
コンナ現代ッ子ニ　ダレガシタ

校長室便り

（文　責）
ドーハ
日本人学校
校長
酢谷昌義

あきらめない気持ちを！

「サッカー」で盛り上がる休み時間

今朝は登校してくるとすぐに、サッカーを始めた子ども達がたくさんいました。しかもＰＫ戦までやっているのです。子ども達にとっては、それだけ昨日の韓国戦のことが印象深く残ったようです。

サッカーの話になって恐縮ですが、今回のアジアカップを見ていて、日本代表は本当に良く頑張っていると思います。先制されて追いかけるという展開の試合が、昨日で３試合目だったように思います。その苦しい展開を乗り越え、勝利に結びつけている選手達の精神的なたくましさに、私はとても感動しました。

サッカーの試合で１点が持つ重みには、非常に大きなものがあります。先制されるということは、それだけ精神的な負荷も大きくなっていきます。それを跳ね返すだけの強さを、今回の選手達は持っているのだと思います。

昨日の試合では、韓国も素晴らしい粘りを見せました。延長戦の後半終了間際に、同点に追いついたのはさすがだと思いました。ＰＫ戦になった時点では、おそらく追いついた韓国の方が精神的には有利だったかもしれません。しかし結果は３対０で、日本が決勝進出を決めました。キーパー川島の活躍はもちろん素晴らしかったのですが、ＰＫをきっちり決めるには、技術以上に精神力が影響するのではないかと思いました。

今回のアジアカップの応援をしていて、決してあきらめないことの大切さを改めて考えさせられました。自分に対しても周囲の人に対しても、「あきらめるな」と口で言うことは簡単です。しかし苦しい状況の中、くじけそうになる心を奮い立たせることはなかなかできるものではありません。日本チームにとっては決勝戦を残すだけですが、子ども達にはこうした大会の応援を通して、あきらめないことの大切さをぜひ見習ってほしいと思います。